

氏名(本籍)	池田英俊(北海道)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第740号
学位授与年月日	平成4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	明治仏教教会・結社史の研究
主査	筑波大学教授 文学博士 大濱 徹也
副査	筑波大学教授 文学博士 田中 圭一
副査	筑波大学教授 文学博士 熊倉 功夫
副査	筑波大学教授 文学博士 宮田 登
副査	筑波大学教授 文学博士 川崎 信定

## 論 文 の 要 旨

本論文は、明治維新によってもたらされた仏教界の近代化について、主として曹洞宗教団の動向を中心に、近代教団としての教理教学の形成をめぐる諸問題を、教会結社の全国的展開と関係づけて検討したもので、8章16節からなる作品である。その視点は、旧教団からの脱却をめざし、いかなる信心箇条を樹立し、教化法を確立しようとしたかにつき、国家と宗教をめぐる政教関係をふまえて位置づけ、排仏論をめぐる論争を検討することで、近代仏教の歴史的位相を明らかにしようとしたものである。

序章「教会・結社史研究の課題と方法」は、研究史を整理し、「仏教衰退史観」の強い影響下で近代仏教の研究がなおざりにされている現状を問い、仏教の近代化をめぐる諸動向を、民衆教化をめざした教会講社が結成されていく時代状況に位置づけて検討すべきであるとの視点を提示し、特に曹洞宗を中心とする禅仏教の研究が急務の課題であることをのべたものである。

第1章「維新时期仏教の新教団形成への胎動」は、大教宣布運動の下で僧侶教導職がおかれていた状況を概観し、東西両本願寺が中心となった大教院分離運動をめぐる、真宗興正寺派華園摂信が諸宗同徳会盟の活動を強化することで維新政府のなかで地歩をきざろうとした動きを紹介し、「政教分離」論のみで維新时期仏教の動向が把握出来ないことを指摘し(第1節)、曹洞宗の指導者であった鴻

雪爪が、宗門抗争を解決し、曹洞宗の教団近代化への組織改革に手をつけた後、仏教復興をはかるべく、還俗して教部省に出仕、仏教による民衆教化の必要性を説き、政府頭官を啓蒙することで、仏教の立場を弁護し、弟子による宗門改革を外からみつめていた姿を明らかとなした上で(第2節)、

民衆教化のための「道」がいかに説かれたかを慈雲飲光の「十善戒」の思想で検討し、神・儒・仏三教をふまえた雲伝神道がもつ意義を問い、感性的自然を肯定する近代化を批判し、自戒内省の場を用意するものであったことを力説している（第3節）。

第2章「教会・結社の成立と新教団の再編」は、明治10年代における教会・結社の盛況をめぐる仏教界の動向を、信教自由の口達を契機に教導職とは異なる僧侶としての本来的使命をいかに自覚したかにつき、大内青巒の啓蒙活動を『明教新誌』の検討によって分析したもので、教学をはじめ仏教各派の宗規・制度の改革をめざし、政治と宗教の関係があらためて問い直され、仏教固有の場を確立するため、和敬会による知識人に対する啓蒙がこころみられたことを明らかとなし（第1節）、そうした活動が教派をこえた通仏教主義による布教を多様に展開していく活力をなしたとして、全国に所在する教会講社を個別的に示した上で、僧侶一体でとりくまれた布教の実態を紹介し（第2節）、その具体的展開を北海道において検証する。北海道開教をめぐる教団形成は、真宗大谷派が本山の財政再建を課題とした「相統講」の拡張をめざすことで門徒を組織することで教団としての基盤を確立したのにならして、曹洞宗が扶宗講社の展開をふまえ、本末関係による説教所の開設をとおり、教団体制が整理された様相を対比することで明らかにし、教団組織に固有な両者の差異を問い（第3節）、さらに真宗大谷派旭川別院が札幌別院から独立昇格し、地歩を固めていく過程で「相統講」が果たした役割を具体的に分析することで、近代教団への再編を民衆的基盤をふまえて問うたものである（第4節）。

第3章「曹洞宗の教会・結社の形成と教化思想の展開」は、出家至上主義による座禅弁道の宗門である曹洞宗が、大教宣布運動にかかわることで、民衆教化のために「曹洞宗教会条例」を公布し、持戒持律の道徳に力点をおく在家・出家二元論による信心箇条の樹立をめぐる問題を明らかとなし（第1節）、大内青巒による曹洞扶宗会の結成とその全国的展開状況をあとづけ、『洞上在家修証義』による在家化導にはたした意味を検討することで、曹洞宗が禅仏教として時代に相応しうる教団としてのありかたをいかに模索していたかをのべたものである（第2節）。

第4章「知識と信仰をめぐる問題」は、社会進化論による開明期知識人の仏教一宗教批判をめぐる知識と信仰の問題を検討したもので、井上円了、清沢満之等の学僧の教学観をふまえ、十善会に参加した沢柳政太郎の信仰を個人の内面にかかわるものとする宗教論がもつ意味を明らかとなし（第1節）、さらに近代思想のなかに仏教をいかに位置づけるかにつき、「開明」と「進化」をめぐる知識人の論争を整理し、信仰の把握をめぐる禅仏教が知識の進展による信仰の変遷を説くのに対し、浄土教が知識と信仰の融合をめざしたように、禅仏教のなかにも進化論をふまえた提言がみられることを指摘する（第2節）。

第5章「破邪顕正思想の展開」は、基督教に対する排耶論を紹介した上で、破邪顕正が基督教排撃としてのみ論じられたのではないことを指摘し（第1節）、禅仏教では破邪顕正が知識人の非宗教、反宗教的な「仏法を信ぜざる害」にあるとなし、文明と宗教の関係を問い、自然的欲望を禅仏教の立場から位置づける思想的営為がなされていたことを明らかにしている（第2節）。

第6章「近代仏教成立期における戒律と倫理の葛藤」は、近代教学の体系化と宗教実践の方途を

模索するなかで、民衆教化をめざした教理教学を確立すべく、資本主義社会に相応した世俗倫理を提言しようとした(第1節)、そのさい東北地方に教会・結社の設立が多く見られることに着目し、東北布教に従事した問題とかかわらせて、吉岡信行の『求化微糧談』の世界を、懺悔・三帰戒・念仏が一体となった(懺帰戒念仏)の思想とかかわらせて検討し(第2節)、肉食妻帯が世俗法で公認され、仏教が世俗化するほどに破戒と倫理の問題のみならず、出家主義が根底から問われることとなった(第3節)。

終章は、全体の内容を要約し、問題意識を整理した上で、出家主義の新たな位置づけが問われているとなし、近代禅仏教史研究への提言をしたものである。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、教会・結社運動をふまえて誕生した曹洞扶宗会—曹洞教会の展開を軸に、出家、在家二元論にもとづく救済論の形成を、国家と宗教、知識と信仰をめぐる思想のドラマとして展開したものである。

近代仏教史の研究は、「仏教衰退史観」の影響もあり、ほとんど手がつけられていない分野の一つである。本論文は、この未開の原野に鋏をいれるべく、巻末「史料目録」にみられるような第1次史料の踏査収集をもとに、曹洞宗教団を中心とする仏教教団の近代化を、教会・結社運動をめぐる教団組織の再編問題、近代社会に相応しうる教理教学の形成をめぐる問題として解明しようとした本格的な論文である。その特色は (1)大教宣布運動の展開をふまえ、教会・結社の全国的様相を明らかにしたこと、(2)大内青巒の指導による曹洞扶宗会の結成が曹洞宗教団の近代化を推進したこと、(3)民衆教化をめぐる教理教学の確立について、大内青巒をはじめとする知識人がはたした役割について具体的に位置づけたこと、(4)特に知識と信仰、倫理と宗教をめぐる論争を紹介することで、近代日本の知の位相をあとづけようとしたこと、(5)なかでも近代仏教の形成を教団組織論と教理教学論との関連で検討しようとしたこと、等々をあげることができる。本論文は、こうした論点をもとに、明治仏教の内的世界を解き明かしたものといえる。

その論点は、高く評価できるが、教理教学をめぐる思想史的展開がいささか概論的であり、個別論証において弱い。かつ民衆的結社運動の展開と教理教学をめぐる信仰論の相互関係がまだ明解ではないのはおしまれるところである。この問題は、北海道開教史や東北布教史を地域的個性をふまえて分析することで明確に位置づけられる課題であるだけに、今後に期待したいところである。

その歴史像は、明治10年代の社会状況に教会・結社運動を十分位置づけていないとはいえ、日本の近代化に翻弄されながらも、禅仏教としての主体性を確立するために苦闘した宗門人の姿をよく描いている。その点では仏教学から出発した研究者としての個性がいかされている。

以上のような問題点があるとはいえ、新史料をもとに明治仏教が形成した世界について、曹洞宗を中心とする教会・結社運動の全体像を提示し、民衆教化をめざした教理教学を、近代知識人の宗

教観を検討するなかで、近代の宗教思想史のなかに位置づけた論文として高く評価することが出来る。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。